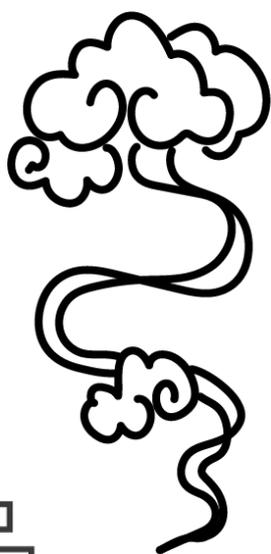


湯島聖堂漢文檢定

寺子屋編 漢詩

上級





芙蓉楼送辛渐 王昌龄

芙蓉楼にて辛漸を送る 王昌龄

寒雨連江夜入吳

寒雨江に連なりて 夜吳に入る

平明送客楚山孤

平明客を送れば 楚山孤なり

洛陽親友如相問

洛陽の親友 如し相問わば

一片冰心在玉壺

一片の氷心 玉壺に在り

詩の意味

芙蓉楼で辛漸を送る

冷たい雨が長江のほうから、夜になって吳の地へと降り注いできた。やがて夜も明けるころ、旅立つ君を見送ると、楚の山がぼつんと見える。(君(辛漸)が洛陽に帰った後に)洛陽の親友たちが「かの地の王昌龄はどうしていた」と尋ねたら、「私(作者)は、一片の氷が玉壺の中にあるような澄み切った心境でいた」と伝えてくれ。

語句の解説

- 芙蓉楼：現在の江蘇省鎮江市の長江の川岸に建つ楼。
- 辛漸：作者の友人の名。このとき、これから洛陽に帰ろうとしている。
- 寒雨：冷たい雨。
- 吳：江蘇省一帯の呼び名。
- 平明：夜明け前の薄暗いころ。
- 洛陽：河南省洛陽市。唐の副都。以前作者が滞在していた所で、これから辛漸の向かう所。
- 氷心：氷のように澄み切った心境。
- 玉壺：白玉で作られた壺。

作者の紹介(王昌龄)

中国、唐の時代の詩人(六九〇?〜七五六?)。字は少伯。若くして進士(役人を選ぶ試験)に合格して役人となりました。しかし、気ままな性格で、地方の役人で終わりました。七言絶句に優れ、戦争を舞台にした詩や、女性の心を詠んだ優れた詩を残しています。

黄鶴樓

崔顥

黄鶴樓

崔顥

昔人已乘二黄鶴一去

昔人已に黄鶴に乗りて去り

此地空余黄鶴樓

此の地空しく余す黄鶴樓

黄鹤一去不復返

黄鶴一たび去りて復た返らず

白雲千載空悠悠

白雲千載空しく悠悠

晴川歷歷漢陽樹

晴川歴歴たり漢陽の樹

芳草萋萋鸚鵡洲

芳草萋萋たり鸚鵡洲

日暮鄉關何處是

日暮れて郷関何れの処か是なる

煙波江上使人愁

煙波江上人をして愁えしむ

詩の意味

黄鶴樓

昔この地を訪れた仙人はすでに黄色い鶴に乗って飛び去ってしまい、

(今)この場所にはただ黄鶴樓が残っているだけだ。

黄色い鶴は飛び去ってしまったもう帰ってはこない。

(空には)白い雲が千年もの間ゆったりと流れてゆくだけだ。

晴れ渡った長江の向こう岸には漢陽の町の木々がはつきりと見てとれるし、

香わしい春の草花が鸚鵡州には茂っている。

夕暮れ方、わが故郷はどのあたりかと眺めやれば、もやの立ちこめる長江のほとりの夕景色は私(作者)を望郷の愁いに浸らせるのだ。

語句の解説

○黄鶴樓：湖北省武昌地区の長江川岸に建つ楼の名。

○晴川：晴れ渡った長江。

○次のような伝説で有名である。

○歴史たり：はつきりと見分けることができるようす。

○酒店の辛氏の所にやって来た老人が、酒代として黄色い鶴を描いた。客が手をたたくと鶴が舞うので評判になり、店は繁盛した。十年過ぎたあと、再び老人が現れて、黄色い鶴にまたがり白雲に乗って飛び去った。辛氏はこれを感謝し、楼を建て黄鶴樓と名付けた。

○漢陽：黄鶴樓のある武昌地区とは長江をへだてた対岸の漢陽地区。

○芳草：香しい草花。

○萋萋：草が勢いよく育っているようす。

○再ひ老人が現れて、黄色い鶴

○鸚鵡洲：湖北省武漢市を流れる長江にあった中洲の名。

○去った。辛氏はこれを感謝し、楼を建て黄鶴樓と名付けた。

○郷関：故郷。作者の故郷は汴州、現在の河南省開封市である。

○昔人：昔の仙人。黄色い鶴を描いた仙人。

○千載：千年。長い年月。

○悠悠：他のものと関わりを持たないようす。

○何れの処か：どこかという疑問詞。

○煙波：もやの立ち込める水面。

○作者の紹介(崔顥)

中国、唐の時代の詩人(七〇四?七五四?)。字は不詳。若くして進士(役人を選ぶ試験)に合格して役人となり、玄宗皇帝の時代には朝廷に勤めました。詩の才能はあったものの、酒とばくちに明け暮れる生活でした。

○煙波：もやの立ち込める水面。

○作者の紹介(崔顥)

中国、唐の時代の詩人(七〇四?七五四?)。字は不詳。若くして進士(役人を選ぶ試験)に合格して役人となり、玄宗皇帝の時代には朝廷に勤めました。詩の才能はあったものの、酒とばくちに明け暮れる生活でした。

香炉峰下、新ト山居、  
 草堂初成、偶題東壁、  
 白居易

白居易

白居易

日高睡足猶起備  
 日高く睡り足りて猶お起くるに備し

小閣重衾不害怕  
 小閣に衾を重ねて寒さを怕れず

遺愛寺鐘欹枕聽  
 遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き

香炉峰雪撥簾看  
 香炉峰の雪は簾を撥げて看る

匡廬便是逃名地  
 匡廬は便ち是れ名を逃るるの地

司馬仍為送老官  
 司馬は仍お老いを送るの官たり

心泰身寧是歸處  
 心泰く身寧きは是れ歸する處

故郷何獨在長安  
 故郷は何ぞ独り長安に在るのみならんや

詩の意味

香炉峰のふもとに、新たに山の住まいを建て、茅葺きの家が完成した時、  
 ちよとど出来た詩を東の壁に書きつける。

日は高くのぼり、眠りは十分足りているが、まだ起きるのはめんどうくさい。

小さな二階造りの部屋で重ねた布団にくるまって寝ているので、寒さは心配ない。  
 遺愛寺の鐘は、枕を縦にして聞き入り、  
 香炉峰の雪は、布団にくるまったまま簾をはね上げて眺めやる。  
 この廬山は俗世間の名譽から逃れて隠れ住むのになさわしい土地であり、  
 司馬という名目だけの閑職も、老人が余生を送るのにはちよとどよい。  
 心が安らかで、身に不安がなければ、そこが落ち着く場所であり、  
 どうして都の長安だけが故郷ということがあろうか。

語句の解説

- 香炉峰：江西省九江県にある廬山の峰の一つ。
- 下：ふもと。ここでは、香炉峰のふもと。
- 山居をトし：山中の住居を占つて建てて。
- 草堂：かやぶきの家。
- 初めて：ししたばかり。
- 偶ま題す：思いがけず出来上がった詩を書きつける。
- 小閣：小さな高殿。ここでは「草堂」のこと。
- 衾：かけぶとん。「ふすま」とも読まれる。
- 遺愛寺：香炉峰の北方にあった寺院の名。
- 枕を欹てて：枕を縦にして。
- 簾を撥げて：簾をはねあげて。
- 匡廬：廬山のこと。昔匡という隠者が世を逃れ住んでいたことから、この地を匡の廬山の意味でこのように呼んだ。
- 便ち：とりもなおさず。
- 名を逃るるの地：名譽心や名声から逃避する場所。
- 司馬：州の長官を補佐する役職。名目だけの閑職であった。

- 老いを送るの官…余生を送るの  
に適した役職。
- 心泰く…心が安らかでのびのびしている。
- 身寧き…身体に不安がない。
- 帰する処…落ち着いて暮らすことのできる土地。安住すべき場所。
- 何ぞ独り…「どうして〜だけであらうか」という反語である。

作者の紹介（白居易）

中国、唐の時代の詩人（七七二〜八四六）。字は樂天。若くして役人となり、権力者たちを批判する詩を作りました。江州に左遷された後は詩風が変わり、晩年は悠々自適の生活を樂しみました。その詩文集は「白氏文集」と呼ばれ、日本人に多く読まれました。

楓橋夜泊

張繼

楓橋夜泊

張繼

月落<sub>チ</sub>烏啼<sub>イテ</sub>霜滿<sub>ッ</sub>天<sub>ニ</sub>

月落<sub>ツキ</sub>ち烏啼<sub>からずな</sub>いて 霜<sub>しも</sub>天<sub>てん</sub>に滿<sub>み</sub>つ

江楓漁火對<sub>ス</sub>愁眠<sub>ニ</sub>

江楓漁火<sub>こうかうぎよか</sub> 愁眠<sub>しゆうみん</sub>に對<sub>たい</sub>す

姑蘇城外<sub>ノ</sub>寒山寺

姑蘇城外<sub>こそじょうがい</sub>の寒山寺<sub>かんざんじ</sub>

夜半鐘聲到<sub>ル</sub>客船<sub>ニ</sub>

夜半<sub>やはん</sub>の鐘聲<sub>しょうせい</sub> 客船<sub>かくせん</sub>に到<sub>いた</sub>る

詩の意味

楓橋での船泊まり

月は西に沈んで、烏の鳴く声が聞こえ、空につめたい霜の気配が満ちて  
いる。

紅葉した岸の楓樹、川にともるいさり火が、旅の愁いの浅い眠りの目に  
チラチラと映る。

折しも姑蘇の町はずれの寒山寺から、  
夜半を知らせる鐘の音が、私(作者)の乗る船に聞こえてきた。

語句の解説

○ 楓橋：現在の江蘇省蘇州市の西にある楓江にかけられた橋。

○ 漁火：いさり火。魚をとるためのあかり。

○ 夜泊：夜、船の中で泊まること。霜天に滿つ：天に霜の気配が満ちること。

○ 愁眠：旅の愁いによる浅いねむり。

○ 江楓：川岸の楓樹。「楓」は日本のかえで」と同じものではないが、秋に紅葉する。

○ 姑蘇城：姑蘇山のふもとにある町。現在の蘇州市。

○ 寒山寺：蘇州の西の郊外、楓橋の近くにある寺。

作者の紹介(張繼)

中国、唐の時代の詩人(生没年不明)。字は懿孫。初め、地方の役人となり、のち中央の役人として活躍しました。議論好きな性格で、若い頃から詩人として有名でした。

61

望廬山瀑布 李白 廬山の瀑布を望む 李白

日照香炉生紫煙 日は香炉を照らして 紫煙を生ず

遙看瀑布挂長川 遙かに看る 瀑布の長川を挂くるを

飛流直下三千尺 飛流直下 三千尺

疑是銀河落九天 疑うらくは是れ銀河の九天より落つるか

詩の意味

廬山の瀑布を眺めて 太陽が香炉峰を照らして、紫のもやが立ち昇っている。 はるかかなたに滝が、長い川をたてかけたかのように流れ落ちているの が見える。 滝の勢いは、飛ぶようにまっすぐ三千尺も流れ落ちる。 まるで天の川が、天から流れ落ちるのではないかと思われるばかりである。

語句の解説

- 廬山：現在の江西省九江市の南にある山。景色が良く、多くの峰や滝がある。
瀑布：大きな滝。
香炉：廬山の峰の一つ。峰の形が香炉に似ているところから、その名がある。
紫煙：紫色のもや。

作者の紹介(李白)

中国、唐の時代の詩人(七〇一〜七六二)。字は太白。宮廷詩人として活躍したこともありましたが、放浪の旅暮らしの中から、多くの詩を作り、「詩仙(詩の仙人)」と呼ばれています。唐を代表する詩人で、杜甫と並んで「李杜」と呼ばれます。

九月九日憶<sup>フ</sup>山中兄弟<sup>ヲ</sup> 王維

九月九日山中の兄弟を憶<sup>フ</sup>う 王維

独<sup>リ</sup>在<sup>ッ</sup>異郷<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>異客<sup>ト</sup>

ひとり異郷に在<sup>ッ</sup>て異客と為<sup>ル</sup>る

每<sup>ニ</sup>逢<sup>フ</sup>佳節<sup>ニ</sup>倍思<sup>フ</sup>親<sup>ヲ</sup>

佳節に逢<sup>フ</sup>うごとに倍<sup>ス</sup>す親を思<sup>フ</sup>う

遥<sup>カ</sup>知<sup>ル</sup>兄弟登<sup>ル</sup>高処<sup>ニ</sup>

遙かに知<sup>ル</sup>る兄弟高<sup>キ</sup>に登<sup>ル</sup>る処

遍<sup>ク</sup>挿<sup>シ</sup>茱萸<sup>ヲ</sup>少<sup>ク</sup>一人<sup>ヲ</sup>

遍<sup>ク</sup>挿<sup>シ</sup>て茱萸を挿<sup>シ</sup>て一人を少<sup>ク</sup>くを

詩の意味

九月九日山の中の兄弟を思<sup>フ</sup>つて

自分ひとりが故郷を離<sup>レ</sup>れ、よその町にいる。

めでたい節句に出<sup>デ</sup>会<sup>フ</sup>うたびに、ますます故郷の親兄弟をなつかしく思<sup>フ</sup>う。兄弟たちが高い所に登<sup>ッ</sup>っているその折に、皆<sup>ミ</sup>そろって茱萸を挿<sup>ス</sup>している中に、自分(作者)一人が欠<sup>カ</sup>けているのを、都<sup>ミヤ</sup> 長<sup>ヤン</sup>安<sup>アン</sup>からはるかに想<sup>ゾウ</sup>像<sup>ゾウ</sup>する。

語句の解説

○ 九月九日：重陽の節句。この

○ 佳節：めでたい節句。

○ 日は家族そろって高い所に登<sup>ッ</sup>つて茱萸を挿<sup>ス</sup>し邪気払いをする習<sup>ハ</sup>慣<sup>カ</sup>があつた。

○ 親：親兄弟を含めた一族の意。

○ 高<sup>キ</sup>に登<sup>ル</sup>る処：高い所に登<sup>ッ</sup>つて

○ 折に。この場合の「処」は

○ 異郷：よその町、他郷。ここで

○ 佳節に逢<sup>フ</sup>うことに倍<sup>ス</sup>す親を思<sup>フ</sup>う

○ 遥かに知<sup>ル</sup>る兄弟高<sup>キ</sup>に登<sup>ル</sup>る処

○ 遍<sup>ク</sup>挿<sup>シ</sup>て茱萸を挿<sup>シ</sup>て一人を少<sup>ク</sup>くを

作者の紹介(王維)

中国、唐の時代の詩人(六九九?~七六一?)。字は摩詰。若い頃役人となり、後に、高い地位に就<sup>ツ</sup>きましたが、静かな自然の中で暮<sup>ク</sup>らすことを好<sup>ム</sup>み、都の郊外に別荘を構<sup>カ</sup>え、多くの詩を作<sup>ツ</sup>りました。

63

絶句

杜甫

絶句

杜甫

両箇黄鸝鳴翠柳

両箇の黄鸝 翠柳に鳴き

一行白鷺上青天

一行の白鷺 青天に上る

窓含西嶺千秋雪

窓には含む 西嶺千秋の雪

門泊東吳万里船

門には泊す 東吳万里の船

詩の意味

絶句

二羽のうぐいすが、緑の柳で鳴き、  
一列の白鷺が、青空を飛んで行く。  
窓には西方の山の万年雪の景色が、  
まるではめこんだように見え、  
門前には、万里も遠い東の呉の地からやってきた船が泊まっている。

語句の解説

- 両箇：二つ。
- 黄鸝：コウライウグイス。
- 一行：一列。
- 西嶺：成都（現在の四川省）の西の方の山。
- 千秋の雪：万年雪。
- 門には泊す：門前に船泊まりしている。
- 東吳：東の呉の地方。

作者の紹介（杜甫）

中国、唐の時代の詩人（七一二～七七〇）。字は子美、役人として活躍しようとしたが、思うようにならず、家族を連れて都を離れ、放浪の旅のうちに亡くなりました。優れた詩を数多く残したところから「詩聖（詩の聖人）」と呼ばれています。唐を代表する詩人で、李白と並んで「李杜」と呼ばれます。

涼州詞

王翰

涼州詞

王翰

葡萄美酒夜光杯

葡萄の美酒 夜光の杯

欲飲琵琶馬上催

飲まんと欲すれば 琵琶 馬上に催す

醉臥沙場君莫笑

酔つて沙場に臥すとも 君笑うこと莫かれ

古來征戰幾人回

古來征戰 幾人か回る

詩の意味

涼州のうた

真つ赤なブドウのうま酒を、夜でも光る白玉の杯に満たし、飲もうとすると、せきたてるように琵琶が馬上でかき鳴らされる。酔いつぶれて、そのまま砂漠の上に寝込んでしまっても、諸君どうか笑わないでくれ、昔から辺地に遠征して、無事に故郷に帰ることのできた人はほとんどいないのだから。

語句の解説

- 涼州詞：涼州のうた。辺地の風景や戦争の苦しみを詠じたものが多い。涼州は、現在の甘肅省武威市。
- 葡萄の美酒：西域で作られたおいしいブドウ酒。
- 夜光の杯：西域でとれる白玉で作られた杯。また、ガラスの杯ともいう。
- 琵琶：西方から中国に伝わった弦楽器。
- 催す：杯に満たされたブドウ酒を飲み干すことをせきたてるような調子で演奏する。
- 沙場：砂漠の戦場。
- 君：世間の人々を指す。読者に呼びかける調子。
- 征戦：故郷を離れて戦争に行くこと。
- 幾人か回る：（故郷へ帰ることができた人は）どれだけいるであろうか、ほとんどいない。

作者の紹介（王翰）

中国、唐の時代の詩人（六八七？～七二七？）。字は子羽。豪放な性格で自由奔放に生きました。宰相（総理大臣）に招かれ、役人となりましたが、晩年は地方に左遷されました。辺塞詩人として有名です。

春望 杜甫

春望

杜甫

国破山河在

国破れて 山河在り

城春草木深

城春にして 草木深し

感時花濺淚

時に感じては 花にも涙を濺ぎ

恨別鳥驚心

別れを恨んでは 鳥にも心を驚かす

烽火連三月

烽火 三月に連なり

家書抵萬金

家書 萬金に抵たる

白頭搔更短

白頭 搔けば更に短く

渾欲不勝簪

渾べて 簪に勝えざらんと欲す

詩の意味

春の眺め

都長安の町は、戦乱によりすっかり破壊されたが、自然の山や河は変わらずにある。

荒れ果てた町にも春がやってきて、草木が生い茂っている。

この戦乱の時世に心を痛め、花を見ても涙が流れ落ち、

家族との別れを悲しんでは、鳥の鳴き声にも心を痛める。戦乱を知らせるのろしは、三か月の長きにわたって続き、

なかなか来ない家族からの手紙は、万金に値するほど貴重だ。しらが頭は掻きむしれば、抜けていつそう薄くなり、冠をとめるピンさえも、まったく挿せなくなりそうである。

語句の解説

- 春望：春の眺め。
- 国破れて：国都が戦乱により破壊されること。当時の都は長安。現在の陝西省西安市。
- 城：長安の町。中国の町は城壁で囲まれているので、町のことを城という。
- 時に感じては：戦乱の時世に心を痛めては。
- 別れを恨んでは：家族との別れを悲しんでは。
- 心を驚かす：心を痛める。
- 烽火：のろし。敵が攻めてくることを知らせる合図。
- 三月：三か月の間。戦争状態
- 家書：家族からの手紙。
- 万金に抵たる：多額の金額にも相当する。非常に貴重である。
- 白頭搔けば：しらが頭を掻きむしると。
- 更に短く：髪の毛がますます少なくなる。
- 渾べて：まったく。
- 勝えざらんと欲す：耐えられなくなりそうだ。
- 簪：男が冠をつける時、冠を固定するためのピン。冠をつけられないということは、役人として務められなくなることを意味する。

作者の紹介(杜甫)

中国、唐の時代の詩人(七一二〜七七〇)。字は子美。役人として活躍しようとしたが、思うようにならず、家族を連れて都を離れ、放浪の旅のうちに亡くなりました。優れた詩を数多く残したところから「詩聖(詩の聖人)」と呼ばれています。唐を代表する詩人で、李白と並んで「李杜」と呼ばれます。

涼州詞

王之渙

涼州詞

王之渙

黄河遠上白雲間

黄河遠く上る 白雲の間

一片孤城万仞山

一片の孤城 万仞の山

羌笛何須怨楊柳

羌笛何ぞ須いん 楊柳を怨むを

春光不度玉門関

春光度らず 玉門関

詩の意味

涼州のうた

黄河をはるか遠くまでさかのぼって白雲たなびくあたり、ぼつんと一つの砦が、高い山の上にある。折から聞こえてくる羌人の笛の音は「折楊柳」の曲を悲しげに奏でているが、どうしてそのような曲を奏でる必要があるのか。なぜなら、ここ西の果てにある玉門関までは、春の光はやってこないのだから。

語句の解説

- 涼州詞…涼州のうた。64の王翰の詩の解説を参照のこと。
- 遠く上る…黄河を遠くさかのぼって。
- 一片の孤城…たった一つぼつんとある砦。
- 万仞の山…高くそびえる山。一仞は、約二メートル。誇張した言い方。
- 羌笛…西方の異民族である羌族が吹く笛。悲しげな音色で吹く。
- 何ぞ須いん…どうして…する必要があるのか、必要ない。(反語)
- 楊柳…「折楊柳」という曲の名。別離の時、柳の枝を手折って餞にする習慣があることから、別れの曲をいう。
- 春光度らず…春の光はさしてこない。春が来ないから楊柳は芽吹くことがないので、その枝を折って別れを悲しむ折楊柳の曲を聞いても少しの悲しみも起こらない。
- 玉門関…現在の甘肅省敦煌市の郊外にある関所の名。

作者の紹介 (王之渙)

中国、唐の時代の詩人(六八八〜七四二)。字は季陵。若い頃は、勝手気ままな生活をしていましたが、後に、行いを改め、詩文を作ることに励んで、名声をあげました。

67

飲湖上、初晴後雨 蘇軾 湖上に飲す、初めは晴れ後に雨ふる 蘇軾

水光激灩晴方好 水光激灩として 晴れて方に好し

山色空濛雨亦奇 山色空濛として 雨も亦奇なり

欲把西湖比西子 西湖を把つて西子に比せんと欲すれば

淡粧濃抹総相宜 淡粧濃抹 総べて相宜し

詩の意味

西湖のほとりで酒を飲む、初めは晴れ後に雨水面に輝く日の光はさざ波の上できらめき、晴れ渡った今こそ美しい。山の姿が小雨に煙っている雨の景色も、また、とてもすばらしい。晴れても雨でも美しい西湖の姿を、いにしえの越の美女の西施にたとえるならば、薄化粧でも、厚化粧でも西施が美しいように、西湖は晴天でも雨天でも素晴らしい風景である。

語句の解説

- 湖上…湖のほとりの意。ここで西湖のほとり。西湖は、現在の浙江省杭州市にある、美しい湖。
- 水光…水面に映える日の光。
- 激灩…広々とさざ波が立つようす。
- 方に…今こそである。
- 空濛…小雨にけむってぼんやりしているようす。
- 奇…際立つて優れているようす。
- 西子…西施。春秋時代の越(今の浙江省にあつた国)の美人。
- 淡粧…うす化粧。
- 濃抹…たんねんな厚化粧。
- 相宜し…よく似合う。ちょうどよい。

作者の紹介(蘇軾)

中国、北宋時代の詩人(一〇三六〜一一〇一)。字は子瞻。若くして役人となりましたが、浮き沈みが激しく、晩年は南へ流されました。宋代第一の詩人と言われます。

冬夜読レ書

菅茶山

冬夜書を讀む

菅茶山

雪擁<sup>ハシテ</sup>山堂<sup>ヲ</sup>樹影<sup>シ</sup>深

雪は山堂を擁して 樹影深し

檐鈴<sup>カ</sup>不<sup>レ</sup>動<sup>カ</sup>夜沈<sup>カ</sup>沈

檐鈴動かず 夜沈沈

閑<sup>カニ</sup>収<sup>メテ</sup>乱<sup>ヲ</sup>帙<sup>ヲ</sup>思<sup>フ</sup>疑<sup>ヲ</sup>義<sup>ヲ</sup>

閑かに乱帙を収めて 疑義を思ふ

一<sup>ノ</sup>穂<sup>ノ</sup>青<sup>ノ</sup>灯<sup>ノ</sup>万<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>心

一穂の青灯 万古の心

詩の意味

冬の夜の読書

雪は山の中の家をすっぽり包み、木々の姿は深々と見える。

軒先の風鈴は動かないまま、夜はしんと更けてゆく。

心静かに、読み散らした本を片付けながら、今読んだ書物の疑問点を考え、

稲穂のような青白い炎を見つめると、遠い昔の聖人や賢人の心が照

らし出されてくる。

語句の解説

山堂…山の家。

樹影…木の姿

檐鈴…軒先につるした風鈴。

「檐」は、家の軒先。

乱帙…帙から出してちらかって

いる書物。「帙」は、和とじの

本を包むもの。

疑問点。

一穂の青灯…稲穂に似た青白い

炎をいう。

万古の心…遠い昔の聖人や賢人

の心。

作者の紹介 (菅茶山)

江戸時代の詩人、教育者(一七四八〜一八二七)。備後(現在の広島県)の人。姓は菅波、名は晋帥、号は茶山(「さざん」とも読む)。京都に学び、帰郷して黄葉夕陽村舎という塾を開きました。この塾は後に廉塾という藩校になりました。そこでは若き日の頼山陽が、塾生たちの教育に当たったことも知られています。

湯島聖堂漢文検定 テキスト

寺子屋編 漢詩 上級

編集 湯島聖堂漢文検定編集委員会

発行日 令和六年六月一日 初版発行

刊行 湯島聖堂漢文検定編集委員会

東京都文京区湯島一の四の二五 湯島聖堂構内

制作 朔工房

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は禁じます